

文芸

俳句

卯浪立つあかぼっけという岬
玉虫 栗扇

窓越しに眼に入る牡丹の伸び速く
はやも花芽を抱きゐるなり
吉岡 信子

空と地と田の面に映えて五月来る
土屋 美枝子

四月末桜に出会いし水上は
西山満里子

水張田に浮かぶ白雲五月来ぬ
土屋 美枝子

桜前線今通らし
西山 满里子

声はずむ筈で飯炊けました

池田 逸子

パンクーバーオリジンピックの開催に
バシマーバー

箱を茹で父母の恩に謝す

納屋に打つ正午の時報本の茅晴

伊藤 敬子

日の丸の旗大きく揺るる

白無垢や薫風そよぐ雅樂の音

今閑満喜子

小雨降る石段を登りて見上げたる

轡えたつあけぼの杉の茅立ちかな

早川 勇

八角三重の国宝の塔

肩車はしゃぐ子の手に藤の花

江森 悅子

連れもなく独りぼっちの空間に

轡たりに乗つたる筆の走りかな

魚地 照子

包まれるたりはとバスの中

轡たりに伸びる轡深し

川島 孝夫

島田ますみ

轡れなぎむ風の色にも五月かな

兵役の体験なども老人クラブの

一面を黄に染めてゐる菜の花の

轡れなぎむ風の色にも五月かな

総会に歌ふ同期の桜

放つ香りにむせかへりそふ

轡れなぎむ風の色にも五月かな

ボリュームを上げてモーツアルトの四十番

轡れなぎむ風の色にも五月かな

花筏分けてボートを漕ぎにけり

轡れなぎむ風の色にも五月かな

向後 寛

轡れなぎむ風の色にも五月かな

花筏渡らせえ地蔵尊(左の計に)

轡れなぎむ風の色にも五月かな

手品師に心奪はれ花舞台

轡れなぎむ風の色にも五月かな

春日傘たたみて投げるお賽錢

轡れなぎむ風の色にも五月かな

佐瀬 輝夫

轡れなぎむ風の色にも五月かな

憂き心蒲公英の野に捨てにけり

轡れなぎむ風の色にも五月かな

宍倉 道子

轡れなぎむ風の色にも五月かな

一村を貫く水路五月かな

鈴木とし子

轡れなぎむ風の色にも五月かな

母も居て畠のはずれの花胡桃

鈴木 利子

轡れなぎむ風の色にも五月かな

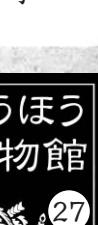
短歌

うほ博物館

篠本城跡の徳利と杯

とっくり さかずき

吉岡 信子



田焼を真似て磁器生産を開始しました。こうして、瀬戸は陶磁器の大生産地となり、現在では、陶磁器の呼称は“セトモノ”とも言われるまでになりました。

平成五年から九年まで発掘調査された篠本城跡からは多くの

陶磁器が出土したことは、広報紙3月号で掲載しましたが、今

回はその中でほぼ完全な形で出

た徳利と杯を紹介しましょう。

写真中央の器は、口が小さく、

肩が膨らんで底へ少しすぼんだ

形で、高さ24cm、径15cmを測り、

表面全体に薄緑色の釉がかかる

た瓶」と呼ばれる陶器です。写

眞手前の二点は、縁が丸く立ち

上がった小さい皿で、径10cmほ

ど、乳白色の生地の縁に薄緑

色の釉がかかっていることから、

これららの焼き物は十五世紀の

中頃に、現在の愛知県瀬戸市で

焼かれた、当時としては国内唯一の施釉陶器です。瀬戸では平

安時代の中頃、それまで作られていた須恵器から中国製磁器を

まねで、施釉陶器の生産が始ま

りました。初めは中国製磁器を

写して壺や碗が作られましたが、

次第に二一寸に合せて様々な形

の器が作られ、江戸時代には有



▶出土した徳利と杯

田焼を真似て磁器生産を開始しました。こうして、瀬戸は陶磁器の大生産地となり、現在では、陶磁器の呼称は“セトモノ”とも言われるまでになりました。

さて、篠本城跡で出土した瓶

子と小皿は多數ありましたが、

ほぼ完全な形で出土したのは写

眞の二点のみで、大切に扱われ

ていたことが推測できます。瓶

子は、酒徳利として、小皿は普

段お酒を飲むときに使われた杯

と思われます。ちなみに客人を

招いての酒宴では、酒杯に土器

小皿（かわらけ）が使われたこ

とがわかっています。